



JEG ニュースレター 123号

www.jegch.jimdo.com

2012年2月29日発行

小さな証

スイスJEGが支援する神学生菊地祥彦兄を仙台に訪ねて筆者がみたものは、。



2月の礼拝

26日は、マルティンマイヤー牧師をドイツから迎え、多くの若者とともに礼拝を守る幸いを得ました。



友遠方より来る、

南国宮崎から里帰り中のローゼンクランツ宣教師ご家族をお迎えしました。



被災地からのレポート

東日本大震災の被災地に立った本教会会員・本園万子姉の渾身のレポートです。



小さな祈り

主よ、見えないものを信じる知恵と力をお与えください。
主よ、聞こえない御声をみ言葉を通してお与えください。
こんな私を、赦し救ってくださった主にお仕えしたいのです。
天の御国でお会いできる日まで。



聖なる父。あなたが私に下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください。それは私たちと同様に、彼らが一つとなるためです。

ヨハネ17、11

東日本大震災から一年



「崩れた三つの壁」
2011年3月11日の東日本大震災により、これまでのキリスト教界にあった3つの壁、「教派と教派」「日本と海外」「教会と地域」が崩れました。そこで、使命を受けた人々が、東日本の復興という目的のために一つとなり、主の栄光を現わす時がきています。

津波に流されたシーサイドバイブルチャペル（仙台）跡に立つ菊地神学生

ちいさな証

クリスチャンが一つになるとき、

本園万子 (かずこ)

スイス日本語福音キリスト教会会員



1月にスイスJEGが支援する神学生、仙台の菊地君を訪ねました。スイスJEGや友人から預かった義捐金を菊地君が所属する仙台・利府教会内に設立された被災地支援団体のオアシスライフ・ケアに届けるためでした。

実は、私は心身ともにバランスを崩して、1年もJEGに足を運んでいませんでした。その

間、子供たちが通う現地教会へは通っていたものの、信仰からは何歩も後退していました。そんな危険な状態の時、アフリカにいた福島出身の青年とFacebookで出会いました。彼は牧師の3男で、数年前に知り合った頃は、少し生意気そうでした。

数回メッセージのやり取りをした後、彼は、「クリスチャンじゃないけど、僕なりに祈りしてます。」と私の椎間板移植手術のことを気遣ってくれました。東日本大震災の後のことでした。それから、音沙汰無いこと5ヶ月、いきなり、我が家に滞在していいかと打診してきました。以前、「日本に帰る前にスイスに立ち寄りなさい」と書いたからですが、そのメールにはおまけがありました。「洗礼を受けてから、スイスに向かいます。」ということでした。

彼が我が家に来た翌日、JEGに連れて行こうかとも考えましたが、私たちはあまり乗り気がしなくて、山に登って神様を賛美することにしました。信仰に関しては

かなりシビアでとっつきにくい気がして、何気ない2週間を共に過ごしました。私は仕事をしていたので、その間彼はスイス中を旅していました。それにしても、何にでも感動し、素直でよく感謝する青年だと関心したものでした。

そして、今回の里帰りでは、残念ながら、彼と再会することはできませんでしたが、彼のお母様が私に会いに来てくださいました。私は今回の被災地訪問で、三人の青年の成長を目の当たりにしました。三人とも、神様一筋、神様大好き青年に成長していました。神のなさる業のすばらしさに、私もパワーをもらいました。素直に神様を信じ、褒め称え、聖書の言葉を栄養とする彼ら。



仙台行きの寸前にJEGの兄弟姉妹が示してくれた被災地への愛も心に染みしました。1年間のブランクも感じさせない愛。私は、再び、心からの賛美ができそうな気がします。大切にすべきは、主との密接なつながり、ということを利用して利府教会で説教されたクリスチャン新聞編集長の根田氏から学びました。様々な思いを抱きつつも、クリスチャンが一つとなる時がきていると感じました。根田氏から被災者支援のために立ち上げられたDRCnetの存在を聞きました。今、私たちにできる小さなことが見つかるかもしれません。

I love Jesusと高らかに声を上げ、ハレルヤコールを続けよう。神のなさることは時に適って美しい。神は万事を益としてくださる唯一の存在。溢れる喜びの中で。

I love Jesusと高らかに声を上げ、ハレルヤコールを続けよう。神のなさることは時に適って美しい。神は万事を益としてくださる唯一の存在。溢れる喜びの中で。

Hope For Living.net

My Hope Story

Hope for the Future

Tree of Hope

Words of Hope

Prayers of Hope



「原発に一番近い教会」

大分朝日放送で流浪の教会、福島第一聖書バプテスト教会のドキュメンタリーフィルムの放映がありました（16分間）これは昨年12月に会津から米沢へも取材に来た番組です。

http://.be/juW_naUZu7Iyoutu

神戸大震災で弟さんを亡くされた森祐理さんほか、最愛の肉親を失った人々が証をしています。 <http://hopeforliving.jesus.net/>



1、スイス日本語福音キリスト教会の2月は、12日に元OMF宣教師としてタイでお働きに成っていたフォルケツビル・クリショーナ教会のゲルバー・ロルフ牧師から「豊かなプレゼント」をテーマに第2ペテロの手紙1；2-3から、(通訳はクツ・ルツ師) 明るく喜びに溢れたメッセージを取り次いでいただきました。

24日には、リーベンツェラー宣教師からの宣教師夫妻の子として茨城県で生まれ17才まで育ち、帰独後、宣教師として日本に戻り、お働きになっていたマイヤー・マルティン牧師をドイツIhringenからお迎えし、「嵐の中の平安」をテーマにマタイ8章23-27から流暢な日本語でメッセージしていただき、(通訳は：ブラザー直美姉) 私たちは大きな勇気と慰めと祝福を受けました。また、田辺正隆牧師は、マイヤー・マルティン牧師のお父様から聖書の薫陶を受けられ、いまま親交を持っておられます。

なお、マイヤー牧師の当日の説教のドイツ語原稿をご希望の方は松林まで

2、23年の長きにわたって日本と日本人を愛し、福音を伝え牧会してこれ、帰国後もスイスJEGのために力を注いでくださっているゲルスタ牧師ですが、睡眠が妨げられ、積み重なった疲労がとれないため、専門医から休養が即必要との診断が下され、しばらく休職される事になりました。6月末までの礼拝のメッセージをしてくださる牧師先生はすでにゲルスタ先生ご自身で手配されました。ゲルスタ牧師の健康の回復とスイス教会のためにお祈り下されば幸いです。なお、ゲルスタ牧師に対するお見舞いメールやカードは松林まで matsubayashi_family@gmx.ch c/o K.Matsubayashi,Obertobel 972, 9053 Teufen, Switzerland をお願い致します。

3、26日には多くの若者が礼拝を訪れ、愛餐会でひとつのテーブルを囲み、語り合い、グループで賛美する光景が見られました。神様はスイスの教会を愛し祝福してくださっていること実感した瞬間でした。

4、2月14日に、家族揃って里帰りされたローゼンクランツ・クリスチャン、直美宣教師ご夫妻(宮崎在住)とお子さん2人が、スイスJEGの礼拝をお父様を伴われ、主にある豊かな交わりのときを持つことが出来ました。ご家族は3月1日に日本に向かわれます。



2月26日の礼拝/愛午餐会のスナップから

5、パリで寿司職人として再出発された藤巻慎一兄は、2月17日に新装オープンしたしたお店で活躍されています。パリ教会の姉妹が藤巻兄の近況をお知らせくださいました。藤巻兄のためにお祈り下さい。

今夜、開店した新しいお店に行ってきました。今までと同じオーナーが、彼の為に(としか思えない!)素晴らしい場所、素晴らしいお店を出してくれました。今日は、3日目でしたが、既に彼にファンが集い、御客様同士、フランス人や韓国人もごちゃまぜで兎に角楽しく和やかに過ごせる空間が出来ました。よい証の場に用いられますようにと祈ります。ただ、今までは、夜だけだったのが、これから昼夜、毎日続き、ますます、礼拝出席は難しいかもしれません。



6、 昨年のクリスマス礼拝から、京都生まれ育ちで京都弁のデンマーク系米人トムセン・ハンス一家(息子さん二人、娘さん四人) がスイスJEGファミリーに加わられました。夫人のトムセン千香子姉が、京都東福寺 塔頭「東光寺」tel:075 541 7601 で、3月2日から4日の10時から4時まで、カリグラフィ作品展を開かれます。千香子姉も会場に詰められますので、京都近辺にお友達にお知らせ下されば幸いです。トムセン千香子姉のHP：www.japanese-calligraphy.net

7、3月11日(日) チューリヒ市 Gemeinschaftszentrum Riesbach <http://ja-jp.facebook.com/Recovery.Nippon.Project> で開かれる第3回リカバリー日本プロジェクト・チャリティーバザーにスイスJEGからも2度目の出店をいたします。この日はスイスJEGのリーダーセミナーがあつて役員/世話人が参加できませんが、トムセンファミリーが参加くださいます。感謝。よき証となれますようお祈りください。

8、スイスJEG で洗礼を受けられた磯辺裕幸兄は帰国され、田辺牧師が牧会された川崎市、生田丘の上キリスト教会の礼拝に忠実に出席され、交わりを持っておられます。このたび、山口康友牧師より転会許可願いがだされましたので、役員会にて承認しました。

9、4年8ヶ月の任期を全うされたケルンボン日本語教会・林原泰樹牧師は3月18日同教会で最終説教をされ、3月20日に帰国されます。詩人でもある淑子夫人から、帰国を前にしての2編の詩が届いています。欧州日本語教会よりコーナーでお読みください。ケルンボン教会では、11人目となる斉藤篤牧師が就任され、3月25日に初めての説教礼拝が持たれます。

10、オーニング宣教師およびラシェンコ・ペラ宣教師からの Rundbrief、工藤篤子メールマガジン182号、吉村美穂NL60号、井野葉由美メルマガ84号、バルセロナ日本語で聖書を読む会月報、デュッセルドルフ日本語教会月報、ケルンボン教会月報、ルーマニア川井牧師の週報、夜越山祈りの家キリスト教会月報が届いています。読みたい方、定期的にお受け取られたい兄姉は松林までお知らせください。

日出ずる国から

”スイスが近くなりました”

神奈川県は大和市の
豊川泰子姉から

神奈川県大和市から“こんにちは！”立春が過ぎ日本の寒波は少し和らぎましたが、それは東の間の温かさでした。再び寒さは元に戻って参り、身も心も寒さで凍りそうになっていた時にスイスからのニュースレターを受け取り、私達に関わりあったヨーロッパ日本語キリスト教会からの記事を多く目にして嬉しく、心に温もりとパワーを沢山頂きました。

特に、クンツ・プリスキア宣教師の東京都町田市にある奉仕教会が、私の住まいのある大和市の中央林間から小田急江の島線で4つ先の駅に在ることが判り驚きました。



早速、松見ケ丘教会とクンツ先生に連絡をして5日の礼拝に伺ってお会いする事が出来ました。

クンツ先生がお隣の町田市にいられている事は9月のニュースレターで知り、お目に掛かりたくてずっと祈っていましたので、神様の導きでお会い出来た事を心から感謝しています。

教会の方々も辻本牧師はじめ皆さん暖かく話し掛けて下さり、23日の婦人会に誘って頂きました。その日はクンツ先生の義理の弟さんの大八木さんも礼拝にいられてお会いしました。

神奈川県大和市は人口22万余りの街ですが、つい最近、ローザンヌ国際バレエコンクールで優勝した17歳の菅井円加さんが6歳から通うバレエアカデミーが在ります。

この街からビッグニュースを発信できて嬉しく感謝致します。遠く大陸を越えた向こうにあるスイスが、この数週間

急に近くなりました。何時も丹精こめてニュースレターを編集して、送信下さるスイス教会の姉に心から感謝します。いつかスイスをお訪ねして皆様にお目には掛かれますのを心待ちにしています。

喜びと感謝に溢れて
大野キリスト教会 豊川泰子
<toyokaway@gmail.com>

”仙台の菊地君を訪ねて”

被災地からのレポート

里帰り中の本園万子姉から

1月13日宮城県へ菊地君を訪ねて行った。仙台市の繁華街では、あまり、震災の爪あとが残っていなかったが、オアシスチャペル利府キリスト教会のある利府町は、昔農地だったために建物の破損



(倒壊)率が極めて高かったそう。教会が所有している森郷キャンプ場

http://www.kasugaya-roman.com/morigo_camp.html (広大な敷地に宿泊施設や集会場も整っている)は半壊と認定され、営業不能となり、再建するためには相当な費用がかかる。

市町村から出される費用は、建物を取り壊す費用の一部のみ。因みに、半壊と認定された家屋は、殆ど取り壊さなければならない状況であるのに、再建する人へののみ、取り壊し費用の100万円が支払われる。森郷キャンプ場で被害を受けなかった宿泊棟は、3月から11月までCRASH Japanが拠点ベースとして使い、寝泊りをしていた。この施設は、豊かな自然に囲まれているため修養会や研修会には持ってこいの場所だ。人気のない山の中にあるので、音楽部の合宿などにも好評だった。



1月14日菊地君の車で、名取市閑上(ゆりあげ)へと向かった。途中、最近建てられたらしい流されていない家があるところどころ目についたが、誰も住んでいる様子もなく、家財道具もそのまま

だった。家屋の上に乗ったままの自動車も、降ろすのに費用がかかるためそのまま。道路にはひびが入り、電線もまだ立っていないところがあった。瓦礫は撤去され、敷石だけが残った家屋の跡地が延々と続く。地面の草は赤く、流されてきた砂で砂漠のようだった。次の画像は9月現在の様子だが、2012年1月と様子は大きく変わっていない。http://www.youtube.com/watch?v=OKY0t7wmc1c&feature=player_embedded



松島を遊覧したが、海水に浸水した松島は、赤茶けていた。のりやかきの養殖場は破壊され、養殖できるまではしばらくかかるそうだ。松島のカキ料理は広島産だと書いてあった。松島は島が村を守ってくれて、浸水は2メートルで済んだと言う。乗船所の待合室には震災後の写真が貼ってあったが、今は、名残さえ残っていないほど復興されていた。



仙台から松島に向かう電車の車窓からは、青いビニールシートで覆った家屋が目立ち、

もろい家は倒壊、多くの家屋は浸水時の高さのところまでシミが残ったままだった。建て直す費用がなくて、仕方なく現状維持をしているという感じだ。仮設住宅へは行かなかったが、薄い壁であるため、朝は水道管が凍り、水が出ないという。住宅にこもっている主婦のために、オアシスライフ・ケアは経済的自立に向けて、革製品の指導をしながら、製品化の模索中だ。利府教会員の提供により、教会のそばに事務所をかまえ、そこでは、ボランティアで革製品を作っておられる教会員とスタッフが働いていた。



15日主日礼拝は利府教会で捧げた。松田牧師が出張だったため、代わりにクリス



チャン新聞編集長の根田さんがメッセージをしてくれた。ルカ10書38節のマルタとマリアの箇所より、「必要なことはひとつだけ。主と共にいることを喜ぶこと」という分かりやすい説教だった。

根田さんはDRCnet (<http://drcnet.jp/201110/>) を立ち上げ、クリスチャンが一つとなり、もっと効率的に被災者援助をしていく事を目指されている。疲れた牧師がいる教会へは説教者を送るなどの貢献もしている。それから、福島出身の農家の主婦である牧師夫人とお会いした。彼女からサマリタンズ・パース (<http://www.samaritanspurse.jp/jp/>) の話しを聞いた。大工や左官をアメリカから送り、家屋の復興を材料費のみで行なっているという。結局は日本赤十字そのものからの支援を受けている人は皆無に等しく、ボランティア団体の功績が大きいらしい。

日本臨床心理学会が立ち上げた組織では、被災地全域を網羅し、特に、学童と教師のサポートを行なっている。昨年いっぱいまでは、企業に頭を下げて資金をかき集め、ボランティアの臨床心理士を現地に送り、サポートを続けていたが、業績を認められ、やっと国会から法人として認められ予算を組んでもらえるという。ここでも、日本赤十字社からの援助はもらえていない。まずは、孤児の引き取り先、そして、転校先でのいじめの問題に取り組み、それらの問題を解決できない教師への指導もしている。



特に、岩手県への手は、全国的に差し伸べられる率が低く、ボランティアは集中的に同じ場所へしか向かわないため、取り残された村々が多いらしい。そして、保険金目当てで孤児を引き取った親戚（虐待）、引き取り手のなかった16人の子供を孤児院へ手配するなど、仕事は後から後から増えているという。家屋も壊れ、家族も失い、心

が病んでしまった人がたくさんおられるということ。

震災直後は、震災ドロボーが出て、金目になるものは、空き家や車、それから遺体からでも、何でも盗まれたため、被害総額は相当なものらしい。貴金属、カーナビ、家財道具などなど。それから、短期ボランティアに来る人たちにより混乱を受ける人も多いらしく、ボランティアの姿勢を考える必要があるよう



だ。短期間上辺だけ慰められても、という思いの人も多らしい。

そのような、聞こえない声が、現地から寄せられ、そこへカ

ウンセラーやスクールカウンセラーの指導者を全国から送っているという。しかし、人員と資金不足で、被災地の牧師同様、休みは返上しての貢献らしい。特に、臨床心理学を学んでいる大学生や学院生の活躍が大きかったが、全国からのかき集め人員のため、統括するのが難しく、連絡不行き届きなどの問題が多々あったらしい。どこへ行っても、日本赤十字社に送られた世界からの義捐金800億円の行方に疑問を持っている人は多かった。

福島の農家では、干し柿の出荷により収入を上げている人が多いが、それも出荷停止のため、食べるのは怖いし、捨てるのももったいない、と困っている。しかし、仙台で出会った茨城の農家の若い主婦は、家は半壊、農産物の出荷も制限されたりして、生活は



厳しいらしい。多少セシウムが出たと言われても、他に収入はないし、採れた米を子供にも食べさせるしかない。生きるためには、食べなければならぬし、とても他の被災地のことまでサポートする余裕などない、と言われていたのが印象的。茨城も、取り残された被災地という感じがした。

福島の警戒避難地区では、若い人たちはまとまった一時金をもらって村を去りたい

つまみ食いのようなレポートになってしまったが、海岸では網を引いて漁業をするためにも、海底に沈んでいる瓦礫を撤去しなくてはならないらしく、とにかく、見えない問題がまだまだ山積みされている。平和に生活させていただいている私は、恵みを分け与えるという使命を感じる。祈りの手を挙げ続け、希望を持って、復興の一部を担ってゆきたい。
<kazuko.enzler@swissonline.ch>



ヨーロッパの 日本語教(集)会から

帰国を前にして

ケルン・ボン日本語教会は
林原淑子姉から

今回の私共の渡独は二度目のそれであり、一度目から帰国した後に私は幾篇ものEU詩篇をしたためた。その皮切りとなった二作が以下である。

<憂愁>

ヨーロッパにノスタルジーを抱くようになってしまっはメランコリー
其処は決して故郷などではない故に
黄昏の西の国文化の芳香
宵を迎えて

<普遍>

変わらないヨーロッパ
歴史は過去に非ず
今もまたこののちも
変わらない 生の在り方

しかし今回来てみてどうだろう。高校生の時からヨーロッパ芸術評論に親しんで来た私にとっては、文化に国境なしと言った様相を呈するに至っている。

かけがえのない次女も、わたしからの文化的継承をたった16年の年数で昇華しつつ、その人生を欧州の真っ只中で完遂した。

欧州は最早、私の魂の故郷となった感がある。